

## 新約聖書 ヨハネによる福音書 3章 1節—17節 (新共同訳)

<sup>1</sup>さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であった。<sup>2</sup>ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできないからです。」<sup>3</sup>イエスは答えて言われた。「はっきり言うておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」<sup>4</sup>ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができますでしょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるのでしょうか。」<sup>5</sup>イエスはお答えになった。「はっきり言うておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。<sup>6</sup>肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。<sup>7</sup>『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。<sup>8</sup>風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」<sup>9</sup>するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえますでしょうか」と言った。<sup>10</sup>イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか。<sup>11</sup>はっきり言うておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証ししているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。<sup>12</sup>わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう。<sup>13</sup>天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもない。<sup>14</sup>そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。<sup>15</sup>それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。<sup>16</sup>神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。<sup>17</sup>神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

## 説教「世を愛す」

石原吉郎(いしはらよしろう)さんは、23歳の時に洗礼を受け、キリスト者として生きた詩人です。徴兵され、壮絶な戦争体験をした石原さんは、次の言葉を残しています。「人は死において、ひとりひとりその名を呼ばれなければならないものなのだ」(『石原吉郎セレクション』岩波現代文庫より)。

石原さんは、戦争や大量殺戮において、数に埋もれて、個々人が抹消されてしまうことの理不尽さを身をもって味わいました。

石原さんのこの言葉から、一人の人が天に召された時に行われる葬儀の儀式の大切さを、改めて思わされます。

また、石原さんは次の言葉も記しています。「ただひとつのことが私には明らかである。真剣になること。真剣にくそれ>を求めること。それ以外に私には救いはない」（『石原吉郎詩集』現代詩文庫より）。

本日の福音書には、ニコデモという人が登場します。ニコデモは、ファリサイ派に属する議員です（1節）。紀元後1世紀の当時、エルサレムには、宗教的な事柄と行政・裁判などを司る、ユダヤ人の最高自治機関（サンヘドリン）がありました。七十一人いた議員の一人であったニコデモは、社会的に非常に高い地位にいる人物でした。

そのニコデモが、お忍びのように夜、イエスのもとを訪ねます。ニコデモは、奇跡を行っていたイエスを見て、イエスに関心を持っていました。自らの高い地位だけでは満たされない何かがあり、イエスから教を請いたいという求道心が、ニコデモにはあったのでしょうか。

ニコデモは、イエスを「神のもとから来られた教師」とであると認めていました（2節）。

そんなニコデモの求めに、イエスは水を差すようなことを言います。「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」と（3節）。この言葉は、神の国を見ることは奇跡を見ることではなく、神の国を見るには、自分自身が新たに生まれねばならないという意味です。新たに生まれること、それが神の国を見るための前提条件だとイエスは言っているのです。

ところがニコデモは、この言葉の真意を理解できず、こう答えます。「年をとった者が、どうして生まれることができますよう」（4節）。ニコデモは、「新たに生まれる」ことを、肉体的・物理的な次元で捉えました。ニコデモにとって、新しく生まれ直すなど、不可能に思えたのです。

しかしイエスが語った「新たに生まれる」とは、霊的に新たに誕生することです。「新たに生まれる」とは、人間の生き方、考え方の根本的転換のことです。つまり、私たちの生き方と目標が180度転換することなのです。自分のためのものであったこれまでの人生が転換され、主なる神のために生きる人生が始まる。それが「新たに生まれる」ことなのです。

「肉から生まれた者は肉である。霊から生まれた者は霊である」とイエスは言います（6節）。肉（原文のギリシア語でサルクス）とは、ここでは単に肉体のみでなく、「この世的で俗的な人間の生き方全体」を指します。

「霊」（ギリシア語で Pneuma）——それは、「神のものとしての新しい人間の生き方全体」を指しています。それは、闇がはびこるベツタリとしたこの世に、別の世界から吹き込んでくる風のようなものです。実際に、「霊」と「風」とは、どちらもギリシア語では同じ「Pneuma」という言葉です。

イエスは、このような詩的な表現を使って、さらにこう語ります。「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである」（8節）。

風は、私たちのあらゆる思惑（おもわく）を超えて、思いのままに自由に吹いていきます。「風」とは聖霊、キリストの霊のことです。風がどこに吹いていくのか分からないように、人間は誰も、神のなさを予測することはできません。

ですが、私たちが困難や苦難の中で行き詰まった時など、思いがけないところで聖霊の風は吹いて来て、悩みや苦しみの中に閉じ込められた私たちの心を解放し、導いてくださるのです。

この風のたとえには、非常に深い意味があります。それは霊の特徴と、霊によって新しく生まれた人の特徴が示されていることです。古い、肉的な生き方からの転換を経験することで、人間は自由になり、新しくなります。それは、人間の生まれながらの力によるのではなく、いわば他の世界から吹き込んでくる霊の風を受けることで実現します。

私たちが「霊」によって生まれる時、私たちには、新しい命を生きる希望と喜びが与えられます。その希望と喜びが、私たちの生を支えます。そのような自由と希望と喜びに満たされた、新しい命を生きることがゆるされるところにこそ、この世における大いなる奇跡と祝福があります。

「風は思いのままに吹く」とイエスは言います。そして、霊によって生まれ直した人間も、その風のようなと語ります（8節）。

私たち人間は、自分が風になっているところを想像すると、心もとないかもしれません。そこまで完全に自分を委ねることのできない、自分の中の力（りき）みを感じるのではないのでしょうか。

ですが私たち人間にとって、生きながらにして自分が風のようなになることが、この地上での人生における最終目標なのかもしれません。

先ほどの石原吉郎（いしはらよしろう）さんの詩を、もう一度お読みします。「ただひとつのことが私には明らかである。真剣になること。真剣にくそれ>を求めること。それ以外に私には救いはない」（『石原吉郎詩集』現代詩文庫より）。

真剣に何かを求めることは、思いのままに吹く軽やかな風のイメージとは違うでしょう。ですが私たち人間は、もがき苦しみ、あがき、それでも必死で真剣に何かを求める時期を経ることによって、最終的に、透明で軽やかな聖霊の風のようになれるのではないのでしょうか。

人生におけるあなたの試練、苦しみ、悲しみは、決して無駄にはなりません。それらはのちにあなたが、他者を癒し、他者を救う聖霊の風のような存在になることに導いてくれるでしょう。

私たちはどんな時も、隣人と自分自身のうちに、聖霊による希望と喜びを見出し、神のゆるしと愛のうちに、共に歩んで行きましょう。

お祈りをいたします。

神様。御子イエスを夜に訪ね求めたニコデモのように、私たちも、普段の生活では意識していないものを、霊の導きによって求めることができますように。御子イエス・キリストによって祈ります。アーメン

\*\*\*\*\* 説教ここまで \*\*\*\*\*

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 創世記 12章 1節—4節 a（新共同訳）

<sup>1</sup> 主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。<sup>2</sup> わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように。<sup>3</sup> あなたを祝福する人をわたしは祝福し／あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る。」<sup>4a</sup> アブラムは、主の言葉に従って旅立った。

新約聖書 ローマの信徒への手紙 4章 1節—5節と 13節—17節（新共同訳）

<sup>1</sup> では、肉によるわたしたちの先祖アブラハムは何を得たと言うべきでしょうか。<sup>2</sup> もし、彼が行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前ではそれはできません。<sup>3</sup> 聖書には何と書いてありますか。「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」とあります。<sup>4</sup> ところで、働く者に対する報酬は恵みではなく、当然支払われるべきものと見なされています。<sup>5</sup> しかし、不信心な者を義とされる方を信じる人は、働きがなくても、その信仰が義と認められます。

<sup>13</sup> 神はアブラハムやその子孫に世界を受け継がせることを約束されたが、その約束は、律法に基づいてではなく、信仰による義に基づいてなされたのです。<sup>14</sup> 律法に頼る者が世界を受け継ぐのであれば、信仰はもはや無意味であり、約束は廃止されたこととなります。<sup>15</sup> 実に、律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違犯もありません。<sup>16</sup> 従って、信仰によってこそ世界を受け継ぐ者となるのです。恵みによって、アブラハムのすべての子孫、つまり、単に律法に頼る者だけでなく、彼の信仰に従う者も、確実に約束にあずかれるのです。彼はわたしたちすべての父です。<sup>17</sup> 「わたしはあなたを多くの民の父と定めた」と書いてあるとおりです。死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる神を、アブラハムは信じ、その御前でわたしたちの父となったのです。

教会讃美歌 131番「聖なる聖なる」、238番「いのちのかて」、250番「つくられしものよ」、192番「主イエスよ思いと」。